

時評

総合地球環境学
研究所教授
佐藤洋一郎



牛肉の偽装事件や輸入食品の残留農薬問題などにみるように、日本人の食は今、大ピンチだ。偽装のほつは、健康被害に直接つながりかねない残留農薬問題に比べてそう深刻ではないとの意見もあるが、はたしてそうだろうか。偽装は、とくに加工食品で相当深刻なよう

だ。県内の民間研究所でDNA分析の結果をみせてもらったが、偽装は相当蔓延していると考えたほうがよい。しかもこの問題は、偽装の犯人探しをしてそれを摘発しておしまい、というほど簡単な問題ではなさそう

だ。そもそも食は、土地に根づい

食品偽装問題の背景

たものだった。大むかし、消費者はそのまま生産者であったが、社会の発達とともに生産者と消費者とが分化していった。それでも半世紀ほど前までは、多くの場合、消費者は近在の生産者の手になる食材を買って加工して食べていた。これならば収穫から消費までの時間も短

きた。大むかし、消費者はそのまま生産者であったが、社会の発達とともに生産者と消費者とが分化していった。それでも半世紀ほど前までは、多くの場合、消費者は近在の生産者の手になる食材を買って加工して食べていた。これならば収穫から消費までの時間も短

きている。ここに偽装が日常化

する素地がある。それに食品は

いまや、生産者の手を離れてか

ら消費者の口に入るまでに膨大

な距離を動いている。それに伴

って膨大な量のエネルギーを消

費している。しかもこのように

して作られた食品の一部は消費

(賞味)期限切れで廃棄されて

刻と感じたのは、倫理的問題

とともに、この食のシステムの

複雑さであった。このシステ

ムは、石油がなくなれば成り

立たなくなる、砂上の楼閣な

らぬ「油上の楼閣」である。そ

れに何より、もったいないで

はないか。この上はせめて、移

動距離を縮めることを考えよ

う。消費者も

加工業者もレス

トランも、少し

でも近いところ

膨大な無駄生む「移動距離」

く、保存のための特殊な方策も

要らない。運搬に要するエネル

ギーもごく小さくて済んでい

た。生産者も消費者も、互いの

「顔」がみえていた。

ところがここに来て登場した

加工食品では、ひとつの食品を

製造するのにいくつもの加工品

が使われている。その加工品が

またいくつもの別の加工品で

いるというから、無駄なことお

びた。私たちが目に見え

ないところで、食べる前からじ

つに大きな消費(時には浪費)

をしているのだ。それにもかか

らず加工食品がそれほど高く

ないのは、どこかでよほど大き

な負担がかかっているに相違な

い。

一連の偽装発覚で私がより深

る。

から、できるだけ素材を買う努

力をしてみよう。それだけで

相当の省エネができるはずだ。

それは一時的には物価高をも

たらすかもしれないが、見えな

いところで使われるエネルギー

の量や地球環境に与える影

響まで考えに入れば、決して

損にはならないものと思われ

さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科
修士課程修了。静岡大助教授を経て2003年10月から現職。
植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「D
NA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。